

平成20年10月1日発行 第23巻第5号(総巻第154号)

ナイフの魅力を余すところなく網羅した専門誌

J.W. & John Denton

ラブレス・コレクション(前編)

デラウエアメイド～ローンデール

加藤清志のダマスカス・ナイフ

DAMASCUS Knives of KATO

藤田國宗作 小刀薄緑

はたらく刃物[竹細工]

ナイフマガジン

10  
2008 OCTOBER

Harumi HIRAKAWA

平山晴美

氣魄に満ちたナイフ製作と、その深化

根本朋之  
NEMOTO KNIVES



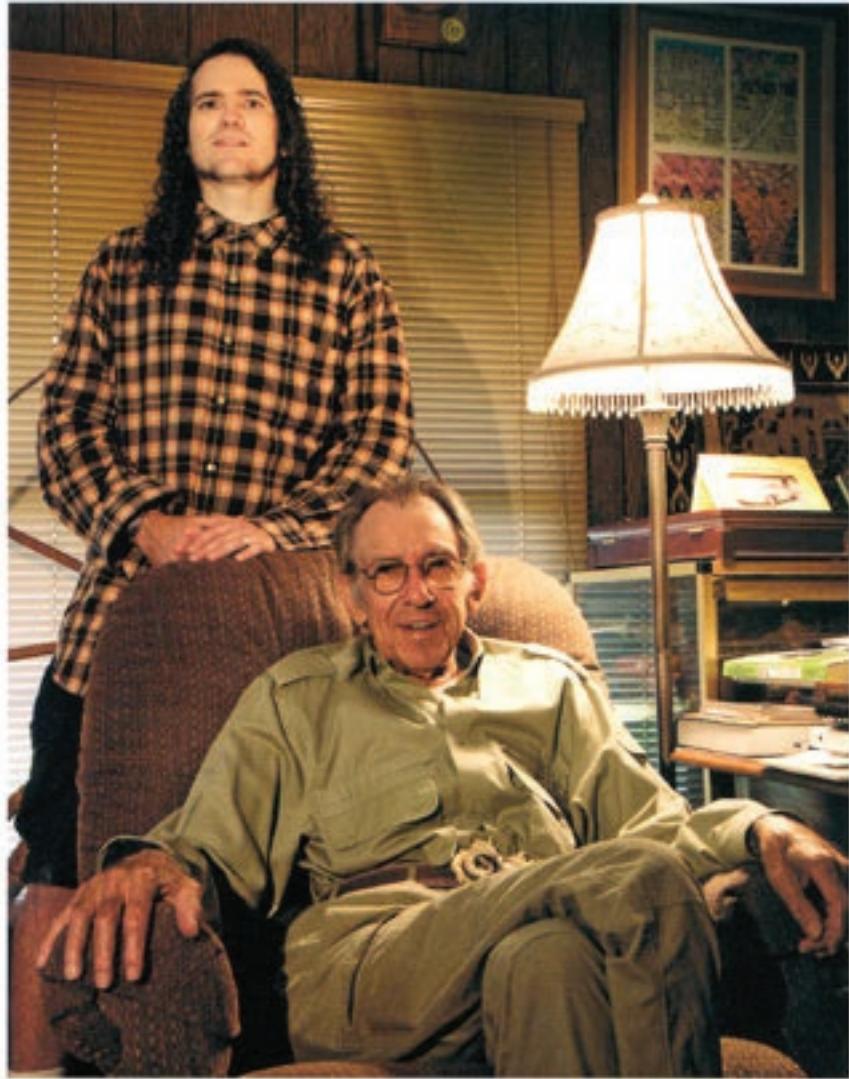
# J.W.&John Denton

Delaware Maid ~ Lawndale

## J.W.&ジョン・デントンのラブレス・コレクション

—デラウェアメイド～ローナーデールー

前編



### ラブレスのことは彼に訊け

ハーリー・ジョンソンは、ハイタッチナー。ドトランクタから車で北に2時間ほど遙に離れた小さな街である。もつ隨分以前から、「ラブレスナイフの「ハーリー・ジョンソン」と、あわや聞かされたものだ。

何でも、もう20年以上も前からラブレスナイフのコレクションを続け、専門店専門のディーラーになってしまったのだ。といつて、一度話を伺ったが、思っていたのだが、いかんせんハイタッチナーは運転に迷く、近頃はJ.W.自身もナイフショウにはそれほど興味を出さなくなっているとか、機会を逃していた。

ところが昨年の9月、初めて訪ねたシカゴ・カスタムナイフショウで、興味深いテーブルに行き当たってしまったのである。

このシカゴショウとどうのは、現在急激に観客数を増やしている比較的新しいショウで、会場、土間の2面に、通常のナイフショウだけではなく、タクティカルナイフ専門の抽選方式ショウやカスタムナイフ・オーディションなどを詰め込んだ新しいスタイルのイベントなのだ。テーブルのホールダー（出展者）もバラエティに富んでいて、アーニー・エマーフィー、ジミン・サンク、フライアン・タイ、チャーリー・ワイスといった師々たるメンバーやディーラーが揃っている。そんな中、「珍しいローラーテーブル時代を始めた」とする、ラブレスナイフをすらりとばかり、20本以上も並べているテーブルがあった。

「テーブルの向いには斯う腰掛けたり座り、腰掛けたりの何かがある」



出金い、コレクション

「ジミー、ハントボラ・ラフレイの交流は、今をさかのぼる事25年以前、1980年代初頭に始まる。

「当時の私はボケットナイフのコレクターでね。ケイス社やシュレイド社など、アクトリーナイフの珍しいものを山ほど持っていたんだ。

「だが、ある日、これらのコレクションに入らぬもじつくりいかないものを感じてしまつた。持つ喜び、が希薄になつて

わ解けり。どうう一点でジョンとの意見  
は一致した  
「じゃあ、来年のブレイドショウの後、  
うちに来ればいいよ」  
そうして生まれたのがこの企画である。

それからも、父が長い間ラ・プレスナ・イフだけを集め続けてきた経験の財物だと思います」

話せば話すほど興味は尽きない。珍しいラ・プレスナ・イフの話になるほど、ジョンの話は熱を帯びていく。終いには手とブルの向こう側にお邪魔して、座り込んで話を没頭してしまった。

質問に答えていた。実際にどのナイトが何をやったのか、何をいつやったのかなど、人間がいなくなるのを見計らうとして詳しく見せてもらつたのです。

驚き様の木、であった。まずは「デラウェアメイド」のフライターが、「少し前に」と「これまでの手本自身がリユーターで監視していたのではないか。他にもう一つ問題しているのではないか」と、

「はい、うなづか、ハナへは私の父です。父は少し体調を悪してらるので、現在では私もじゅくからひきこもっています」「なぜですか？」

「日本には貴重なラブレスナイフが沢山存在しています。私達は、日本の何人かのコレクターとも長年のコンタクトがあ  
る。」



ニューヨークにあった高級スポーツ用品店「アバーコロンビーフィッヂ」の標印が入っている。おそらく1966年に同時に納入されたものであろう。



### DELAWARE MAID "Hunting #6"

ブレイド長4.36インチ、全長9.1/4インチ。グリーンブックP.12に載るハンター・モデルと並んでいる1本。ただしシリアルナンバーは6だ。

しまったんだ」

当時といえば、ナイフマイカーズギルが満足して10年、ブレイド・マガジンも創刊され、一般コレクションの大衆としてナイフが注目を浴び始めた頃である。

「そこで出会ったのがラブレスナイフだった。そのデザイン、質感、仕上げ、握りやすさ、機能性、どれをとっても最高だったな。早速本人に電話をしたよ」

J.W.は1960年代、カーレースのプライベート・ドライバーとして活躍していた時期がある。車が好きなボブとは最初から意気投合してしまったのだそうだ。 「その頃私が使っていたイギリス製のレースエンジンに」エイバー。というのがあってね。なんとボブもエイバーのファンだったのさ」

そうして始まりたふたりの付き合いは、1985年、ノックスビルで開かれたブレイドショウで直接会って、より緊密なものとなる。その後、それまでの数年間は、ナイフのオーダーや口頭のやり取りなど手紙や電話を中心で、親密ではあったがまだ会った事はなかったのだ。

「なにせ3000ロットアイルは離れてるからね。ともあれ、直接会うことが出来て、私の腹に狂いがない」とはりきりしたよ。何はともあれ、運がヤツだった」

「J.W.はボブにとって寶物に水の申し出をする。

「当時のボブは人気マイカーではあったが、養殖していたショウで持ってきたナイフがすべて売れてしまつ、というほどではなかつた。専門が他のマイカートより高かつたからね。それで、もし持ち帰るナイフがあるなら、すべて私に譲つて欲しい」と頼んだのさ」

それからのJ.W.は「貰い」に来る。

場にあるラブレスナイフは、すべて「貰い」だ。ボブには前金でオーダーを入れたもした。珍しいモデルを手に入れる

ために、手元にあるナイフを無く、交換するというのは当たり前で、どんどん自分のコレクションを充実させていったのだ。

「中でも贅沢になつたのは、アル・ワイリアムズだつたな。『リビング・オン・ジ・エッジ』、という本は知つていてるね?」

これはもべ、ラブレスコレクターなら必ず持つているといえるバイブルで、その表紙の色から「グリーンブック」と呼ばれている。

「あの本は1990年に発刊されたのだが、紹介されているナイフのうち何本かは我々が一緒に探したものなんだよ」「そんないまさらがついて、アルのコレクションはそのままほんとが私の手元にこのまま」となったのさ」

「あの方はクリーンハーフックに登場した、ラブレスナイフの各時代を象徴するナイフ達の多くは、今も『アントン・ハイガ所蔵している。因半世紀以上』わたつて古美を繰り返して来たコレクション、それが『アントン・コレクション』なのである。

### デラウェアメイド・ローンテール

本稿では、デハート・ハントの協力により写真一枚が大幅に増えたこともあり、コレクションを前後編に分けず、紹介したい。今面は、ラブレスナイフの初期期であるデラウェア期から、様々なモデルが生まれていく様子、充実の期間となつたロードール期をカバーする。

ラブレスナイフが、生まれたいきさつはよく知られている。若き日のボブが、

高級スポーツ店であった「アバーコロンビーフィッヂ」に、当時高級カスタムで作ったランドールナイフを貰いに行つた。若輩の相員といったボブの外観から、けんもほろろの扱いを受けたことで一念発起して、ランドールを超えるカスタムナイフを作り始めた、といふのである。

### DELAWARE MAID "Hunter's"

上: ブレイド長4.1/8インチ、全長8.1/2インチ。下: ブレイド長3インチ、全長7.1/2インチ。これらもアバーコロンビーフィッヂの標印が入れられたハンター。プラスのヒルトが薄い。





Harry Archer Collection  
"Fighter"

ブレード長6 1/2インチ、全長11 3/4インチ。新しいチューリップウッドのハンドルを採られたファイター。



Harry Archer Collection  
"Big Bear"

ブレード長8 1/4インチ、全長13 3/4インチ。これもハリー・アーチャーが考案したローンテール・ロゴのビッグベア。ブラックマイカルハンドルだ。

### ハリー・アーチャーコレクション

テントン家の「外不出コレクション」は多種多様で、そのいわれを訊いていただけ日が暮れてしまう。そのすべてを紹介するのは不可能なので、ラブレスナイフの中でも人気の高い「シートナイフ」に限る。面白話、を語りましょう。

本人は「ハリー・アーチャー」という、最前線での軍隊経験を持つ収集者であった。ハリーは、「ナイフ。などの著者であるケン・ワーナーと友人で、以前から戦場でユーティリティーナイフとして使える堅牢無比なナイフを探していた。それまでにも、バラシユート・陸下時にロープの緊急切断が必要になつた際に使えるブッシュダガー（ガットフック）のようなロープ切断ツールが装備してあった）を開発していたが、よりは範囲でバランスが取れたナイフを考え続けてい

いう事でこの名が付いたのだ。

このシートナイフをデザインした強本人は「ハリー・アーチャー」という、最前線での軍隊経験を持つ収集者であった。



Harry Archer Collection  
"Boot Knife"  
(上)

"Sticker" (下)

ブレード長4 1/2インチ、全長8 3/4インチ。ブーツナイフより薄く、ヒドンタングル鋼で作られている。

J.W. & John Denton  
Delaware Maid ~ Lawndale

Harry Archer Collection  
"Sub Hilt"

ブレイド長さ 1/2インチ、全長 7インチ、  
約40本しか作成しないといわれる「ラフ  
レス・ジョンソン」のダブルチームロゴを  
彫ったサブヒルト・ブレイターナイフが行  
者として名を遺ねている「How to make  
knife」という本の表紙に使われたので有名  
なナイフだ。



### "2pcs. Stag Banana Skinner"

ブレイド長4 1/4インチ、全長8 1/2インチ。グリーンブックP42に載る、スキナー。通常より幅の狭いブレイド、強斜したヒルト、2ピース・スタップ。コルバス内蔵などの特徴がある。

### "Utility Hunter"

ブレイド長4 1/2インチ、全長9 1/4インチ。クングに "70-461" と刻印されている。1970年に作られたと思われるユーティリティーハンター。グリーンブックP31掲載。



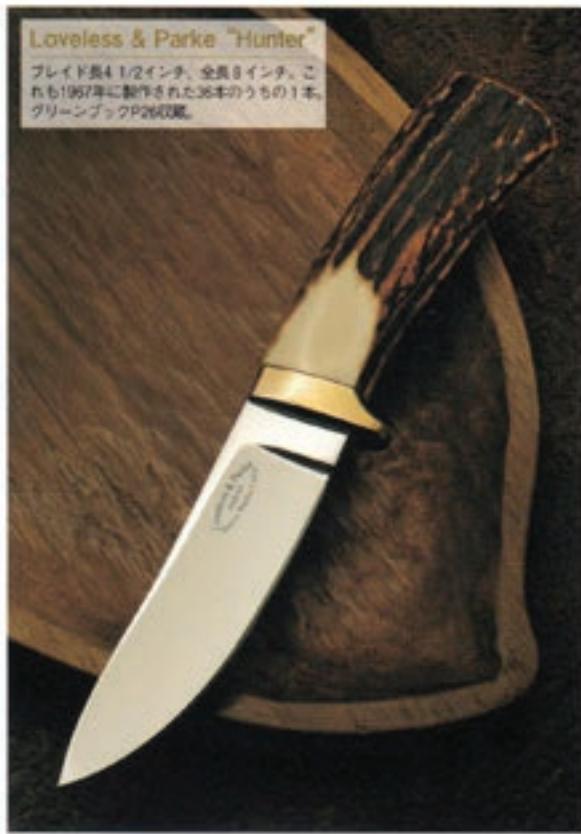
握りのオプションとして、プラス・ラップ (Brass wrap) というタンク部分をプラス材で包むというのがあった。ヒルト部分のセイションもオプションである。

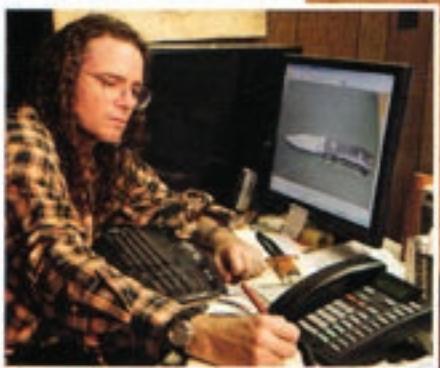
基本的なアイデアはあった。あとはそれをどう具体化するか、だったのだ。そこでナイフ界に詳しいケンが思いついたのが、当時ナイフのデザインならこの人といわれていたボブ・ラフレスだった。というわけだ。

そして出来上がってきたプロトタイプは、ハリーが理想としていた機能とスタイルをすべて併せ持っていた。確かな変更はあったが、"こうしてかの有名な、シートナイフ" が完成したのである。

ラフレスナイフの完成度が気に入ってしまったハリーは、その後も細かな修正を好みにしたナイフを次々とオーダーしていく。そして集まつたのが、現在は「コレクション」にあるハリー・アーチャー







メールをチェックし、返事を作成するジョン。実質的にナイフディーラーとしての仕事のすべては、ジョンがこなしている。



#### LOVELESS/JOHNSON "Improved Handle Semi-skinner"

ブレード長3 1/2インチ、全長8 1/2インチ。ダブルロゴ、インブループドハンドル、ブラウンマイカルタ、と珍しきらけのセミスキナー。

#### LOVELESS/JOHNSON "Randall Hunter"

ブレード長2 3/4インチ、全長6 3/4インチ。ボブのハンティング特開。Randall氏がデザインした小型ハンター。短いブレード、ヒルトレスハンドルのシェイプなどに特徴がある。



#### LOVELESS/JOHNSON "Drop Point Hunter"

ブレード長3 1/2インチ、全長8インチ。これも約40本しか存在しないといわれる「ラブレス/ジョンソン・コレクション」内の1本。中央部に複数のふくらみを見せるハンドルが美しい。

J.W. & John Denton  
Delaware Maid ~Lawndale



**WOOD-LOVELESS "Folder"**

ブレード長3 1/2インチ、ハンドル長4 1/2インチ。10ヶ月の間だけ製作された。バーク・ウッド/ボフ・ラブレスのコラボレーションフォールダーナイフ。ハンドルフレイム材に、ステンレス、アルミ、チタンという違いはあるが、トータルで37本しか作られなかった。写真では、上からチタン製、ステンレス製、アルミ製、となる。チタンとアルミのモデルはサンプルで1本ずつだけ作られたもの。

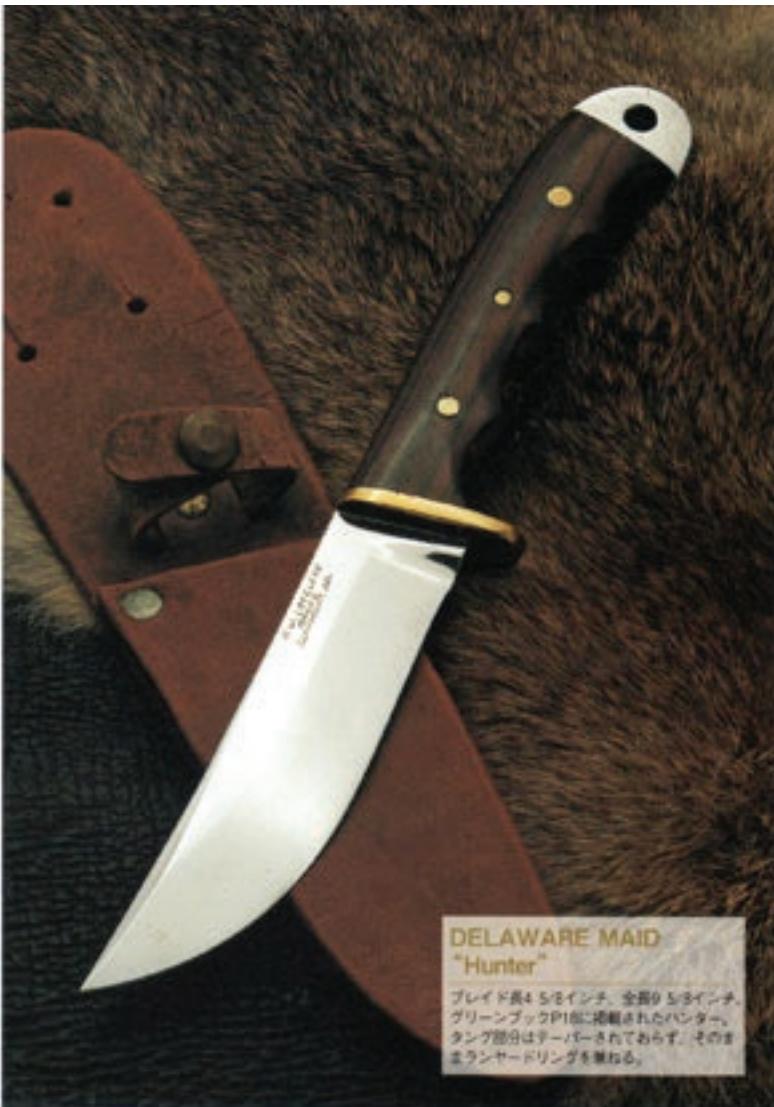
**"Hidden Tang Utility"**

手のヒビゲンタング構造を見るためにハンドルをカットされたギアル。タンク後部には切り欠けがあり、どんなに悪く使っても抜けてくる事はない。

**"Hidden Tang Micro Blade"**

ブレード長2 1/2インチ、全長6 1/2インチ。





**DELAWARE MAID**  
"Hunter"

ブレイド長4.5インチ、全幅9.5インチ、  
グリーンブックP1版に掲載されたハンター。  
タンク部分はテーパーされておらず、そのま  
まランヤードリングを巻ねる。

この「カルフュニア時代」は、最初のナイフが作られた1954年に始まり、1960年には、すぐ「機械工場に就職」、さらに「自分の工場を経営するまでになつていく」まで続く。勿論製作本数は少なく、その稀少性は絶大だ。

テラ・ウェア期のラフレスナイフを握った事のある人なら、このポブの決意はナノイフの造作からありありと感じることが出来る。特にオーダーを受けて作られたナイフは、一本一本ハンドルの厚みや長さが違い、スペイサーやバフトまでもがいちいち路味して作られているのが歴然なのだ。



「それじゃあ、ここからー」と開けてくれたセイフの網。2本と作  
成しない貴重なコレクションがぞろぞろと出てくる。

そのナイフデザインにおいても、ドロップボードポイント、セミスキナー、ダブルグラインドのファイター、ビッグベアなど、その後のラフレスナイフの基本となるナイフ達がこの時期に急速な熟成を経ていて、いっている。

業化が臻るターニングポイントといえる  
ます。1969年、仕事を辞め、フル  
タイムメイカーとして自立する。それま  
では委託を中心とした斐を完つていたがた  
1971年に「ガンダイジニスト誌」の  
50周年号にカスタムナイフメイカーとして  
紹介されると、「一気にオーダーが入る  
よう」になっていく。同じく1971年には、  
あのステイヴ・ジョンソンが制作  
パートナーとしてジョインした。彼のア  
リストがラブレスナイフに与えた影響は  
大きく、ボブは仕事に追われるだけでは  
ない、藝術的な作品を次々に發表し続け

仕事は忙しい。それでもナイフの製作は続いている。住居も転々としていたのでアフレスロコに入る住所も、ノースハリウッド、「ヒューラマドン」と愛称を冠している。一九六七年には、シェラマードで。の住所で初めてバートナーシップをナインとなる。「アフレス＆バーク」、口のナイフを製作もしている。

その後、カリファオルニア州ローハンディール市に工房を移し、新しい「デザイン・バーク」アート。つまり現在のモニターラインに繋がる象徴的な作品を輩出し始める。このローク・ビニール期は、ボブにとっても大きな



**DELAWARE MAID**  
"Half Tang Skinner's"

フレイド長3.3/8インチ、全長7 1/2インチ。ラブレスティフ柄のハーフタング構造を持つスキナー。シカゴにあった“Van Langenbach & Antolini”というスポーツ用品店の蔵に作られた7本のうちの2本。

を記録する事が出来た。なぜせ「日本  
の貴重なナイフ達はかりない」。そ  
の漫録には様々な制約があり、どうまで  
これらのナイフが持つ、漫録。を抽出す  
来たかは、はなはだ心許ない。それでも  
これら精緻のナイフを皆さんと共にぞめ  
る機会を与えてくれた、J.W.とシヨーハー  
は心から感謝を持けたい。